
G o s s i p

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G o s s i p

【Nコード】

N 5 5 6 0 L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

14歳。・・・江戸川コナンと灰原哀が出会って7年目の夏。2人の関係は何も変わっていなかった。

何も変わるはずもなかった。・・・けれど、変化は突然訪れる。哀の前に現れた、とある少女の言葉によって――

哀ちゃん最良サイトCandlelight（どん★ぐりこ管理人こつぶ副創作人）閉鎖による移行作品。中学生コ哀。

a c t 1 .. A i H a i b a r a (前書き)

またあした…とは違う設定です。

このバージョンは、哀ちゃん消えずにそのまま二人解毒剤が完成せず
に中学生まで一緒に生きてきたバージョン。

act1.. Ai Haibara

「江戸川くんと付き合ってるの？」

授業も終わり、教室で一人掃除をしているとき、背後から声をかけられて驚いた。

7月の上旬。暑すぎる教室の中、早く帰りたいと適当に箒をかけ、ちりとりで塵を集め。

制服のシャツ、背筋から一筋の汗が伝い落ちていくのを感じながら、私はまたか、と嫌な気持ちを隠そうとせずにゆっくりと顔を上げ、そこで思わずハツとした。

そこにいるのは。

話したことはないが、見覚えがあった。

名前は知らないが、同じ制服で、同じ色のタイをしているということは、同じ学校で、同じ学年の、他のクラスに所属する女の子なのだろう。

長い黒髪がよく似合う女の子。清楚な印象を持つ女の子で、化粧っ気はないのに、とても美しく。

あの某怪盗の恋人であるあの人ほど似ているというわけではないけど、彼の昔の想い人である女性にどこか似ているようにも感じた。そんなことを言えば、また彼に怒られるだろうことだけど。

でも、彼とよく一緒にいる場面を目にするから、もしかしたらまんざらでもないのかもしれない。重ねて見ているのかもしれない。彼もまた、好きなのかもしれない。

そう思うと、胸がキリリと痛くなる。その痛みの意味は実は知っ
ていて。

「・・・いけない？」
つと口に出たその言葉。

何で言ってしまったのだろう。彼とは付き合っているわけではないのに。

組織が壊滅して、5年。蘭さんが結婚して2年。

彼と彼女に何があったのか推測することしかできないけれど、一時塞ぎこんでいた彼に光が灯されるようになったのは何なのだろう。

気がつけば、

ただ、いつのまにか彼が前より接する時間が増えただけ。

ただ、いつのまにか彼が前より彼女のことを言わなくなっただけ。ただ、いつのまにか彼が前より優しく触れるようになっただけ。

前より優しい瞳をしてくれるようになっただけ。

彼自身が何か言うわけでもない。

『好きだ』なんていうわけでもない。ただ、目に見えて優しくなかったように感じただけ。

彼女の代わりって想われているのならそれは絶対無理なこと。冗談を装ってそう釘を刺したら、彼は笑って否定した。

「あいつとおまえを一緒に重ねられるわけねえじゃねーか。あいつとおまえはまるきりタイプが違うんだから」

屈託のない笑顔で。悪びれのない笑顔で。

でも、貴方はその彼女を愛していたんでしょ・・・？

だったら、私に対する優しさは何なんだろう。

同情なんて、思っただけでほしくない。気遣いなんてしてほしくない。

ただ純粹に『好きでいてくれている』だなんて、どうして思えないんだろう。

いや、きっと信じられないのだ。わからないから、怖いから、彼を遠ざけたくなる。耳を塞ぎたくなる。

なのに、周りからは最近『江戸川と灰原が付き合ってる』なんて噂が流されて。

いわば学校中のヒーローである彼のことで、一度流れた噂は学校中に広まることは間違いなくて。

一日に何人も、とっかえひっかえにその噂の真相を確かめに来る。噂話や恋愛話に疎い彼だが、さすがに自分の元には入っているだろう。

きっと彼は迷惑している、困っている。けれど、それを自分に言わないまま抱えていたり、あるいはそれどころか話題のネタにされてしまったり。

そうなることが一番怖い。

ああ、一体どうしてこんなことになったのだろう。そう常々思っていた。

なのに。

何で今、彼女に対して、そんな「ウソ」を言ってしまったんだろう。また倍以上に噂が広がるのは間違いないのに。

やっぱり、あの彼女と重ねて見てしまったからだろうか。目の前の彼女と蘭さんを重ねて。

「コナンくんとききあってるの？」知らぬ間に、そう聞かれたような錯覚に捕らわれてしまったのだろうか。

言ってから、慌てて口を押さえても、後の祭り。自分の迂闊さにくんざりする。

平常心を装いながら、目の前の名も知らぬその少女の次の言葉を待つ。

少女はがっかりした表情でこう言った。

「そっか、やっぱり江戸川くんの言った通りか。・・・2人が認めちゃ、仕方ないか・・・」

一瞬、耳を疑った。
彼が言った？何を？

「・・・なんて？」

震える声でもう一度聞き返す。

「だあかあらあ、『付き合ってる』って彼が言ったの！！・・・
そうなんでしょ？みんな言ってるよ。とうとう彼が認めたって」

清楚な顔に似合わず、間延びした彼女のその声を聞きながら、言
い知れぬ何かを眩暈と共に感じた。

・・・もしかしたら、もしかしくなくても。
発信源は彼？

その黒髪の彼女のあとの言葉はほとんど何も覚えていない。ただ、
適当に別れて。

――一気がつけば走っていた。彼を探して。

教室。・・・いない。 理科室。・・・いない。 図書室。・・・
いない。 家庭科室。・・・いない。

廊下を駆け抜けて、はあはあ息を切らせながら走り続ける。そし
て、屋上に続く階段を上がって、ドアを開けて。

そこにいるかもしれない彼を探した。

・・・そこにも誰もいなくて、思わず脱力して、胸の奥から息を
吐く。

そして、はあはあと喘ぎながらも、ゆっくりと呼吸を落ち着かせ
ながら歩き出す。屋上の手すりに向かい、一歩ずつ。

そして手すりに手をかけて、地上を見下ろした瞬間、「・・・あ」

思わず呟いた。

彼がいるのは、プールだ。
すぐにわかった。だって、プールのフェンスごしに詰め寄る沢山の水着姿の女子を見たから。

プールサイドと校庭を隔てる一つの境界線。フェンスの向こう側に、彼がいた。

まるでどこかの芸能人か、スーパースター気取り。
またか。そう思わず眉を顰めて、それからまあ、仕方ないか、と思いなおした。

この学校だけじゃなく、全国ネットで有名人の彼。いつでもこんな人だからができるのは当然だ。

8年前に一世を風靡した『工藤新一』のように『彼』もまた今、時の人。どこへ行ったってこんな状態。

だからこそこんな高いところから瞬時に見つけることが出来ただけれども。

だからって今、自分がこんな気持ちのときに、あんな風に暢気な状況を見せつけられるとなんとなくイライラする。

水着姿の女子に囲まれて、きつとへらへらしてるのだろう。最近の女の子は発育がいい。きつと目のやり場に困っている。

自分がこんなに焦って走って混乱していたときに。

それがヤキモチだって言われたらそれまでだけど。

何だか、馬鹿みたい。

・・・もう。

「もう、何、やってんのよ」

そう零した瞬間、地上の彼が、さっと視線を上げた気がした。

目が合った、気がした。こっちを見て、気がついて。にっと笑いかけた気がした。

何故だろう、思わず恥ずかしくなって。さっと顔を引っ込めた。そして思わずしゃがみこむ。

ぺたり、しりもちをついて。そっと両手で顔を覆った。

私こそ、何してんだろ。

大の大人が。『ホンモノの』中学生じゃあるまいし。

体がそうだからと言って、心まで子どもに戻ってしまったのかしら。

全てはさっきあの子に言った言葉がまずかったのかしら。それとも、そのあとに聞いたその情報がまずかったのかしら。

いろんなことが頭に浮かんでは消えていく。

動悸が止まらず、暫くそうやって顔を覆ったまましゃがみこんでいたが、気を取り直して、体に力を入れると、ゆっくりと腰を上げた。

行かなきゃ。・・・今のこんな気持ちを彼に気づかれたくない。

さっきまで真意を確かめようと躍起になっていたのに。今では何故だか顔を合わせることが恥ずかしくなっていた。

逃げなきゃ。逃げなきゃ。

手すりを離れて、早足でドアを開けて、階段を下る。

彼が自分を探しにくるとは限らないのに。

いや、今もし彼と目が合ったのなら、自分が『逃げた』ことをきつと疑問に思っただけを確かめに戻ってくるかもしれない。

彼はそういう人だ。・・・だから困るのだ。

屋上と教室のある4階を繋ぐ階段を下り、さらに校庭へ抜けるために下り続けようとしたその矢先。

下から階段を駆け足で上がる音と、はあはあと喘ぐような彼の息遣いが聞こえ、思わず廊下へと方向転換して、

3階の、すぐ脇の教室に逃げ込んだ。

教卓の影に隠れ、身を潜める。

こんな風に誰かから逃げるだなんて、組織から隠れていたあのとき以来だ。あのときとは180度全然状況は違うのに。

見つかりたくない、という気持ちもあって。でも、見つけて欲しいという気持ちもあって。

なんだか自分の心が、よくわからない。

しばらくすると彼の荒い息遣いと、階段を上る音はすぐ近くに聞こえ、そのまま遠ざかっていった。

ほっと胸を撫で下ろす。少しがっかりした気持ちも反面抱えながら。

が、足音はぴたり、と止み、先ほどまで彼女がいた場所へと続くドアが開くことはなかった。

再び遠ざかっていた足音はまた近づいて。こっちに確実に近づいて。

(・・・どうしてっ?)

ドキドキ、ドキドキ、高鳴る鼓動。それと呼応するように、早くなる彼の足音。

階段を下り、廊下に出て、教室の前で立ち止まり。・・・そして。

はぁ、はぁ、と喘ぐ声と一緒に、

「何、やってんだよ」

頭上で、彼の、呆れたような、それでいて安心したような声が聞こえた。

どくん、思わず心臓が高鳴って。それから彼の前に姿を現した。その様子を一時も視線を逸らさず、彼はじっと自分を見つめていた。

「まったく、何やってたんだよ、おまえ・・・」

ようやく落ち着いてきた彼の呼吸。呆れたような視線は少しも変わらない。戸惑いも含めたその表情で、彼が自分を見つめていた。

「・・・それで隠れていたつもりかよ。・・・つか何で隠れてるわけ?・・・俺が何かしたかよ」

・・・お前とかくれんぼなんてした覚えもねーしな。つか、そんなの灰原がするわけねーか。

偶然聞こえた、彼の最後の楽観的すぎる独り言が耳につく。

知ってるくせに。

思わず、そう詰りたい気持ちで睨むように上目遣いで彼を見上げれば、彼は困った顔をしてみせた。

「何かしたのか、俺」

自分のこの表情が思いのほか『YES』となっていたようで。彼はあっさり自分の方に非がある可能性を考え始めていたようだった。

「何、したんだよ」

「私に言わせるの?」

「・・・ああ」

「~~~~っ!!」

もう、どうして彼はこうなんだろう。本当にわからない様子で、彼は戸惑いを隠せない様子で自分を見つめていて。

彼はどこまで鈍いんだろう。私はイライラする気持ちを隠そうとせず、彼にぶつけた。

「・・・あなたなんですよ? 『私とあなたが付き合ってる』なんて噂を流したの」

「はあっ!? ・・・いや、俺じゃねーよ。なんで俺がそんな噂ばら撒かなきゃならねーんだよ」

ばっさり、彼が切り捨てた。即答、というか。不快そうに、心外だ、というように眉を潜めて。

その表情に、思わず脱力感を感じて、溜息をついた。今更ながらあの黒髪の少女が憎い。ホント、適当なことを言って。

そして、やっぱり。・・・胸がきりきり痛かった。・・・悲しい気持ち広がって、目頭が沁みて痛くって。

そんなとき、彼が言った。

「噂は流したのはしらねーけど。ただ、訊かれたから」
「え？」

「訊かれたから、『そうなりたいと思う』と答えた。……
……悪かったかな？」

「！なんてっ……」
「つか、お前だってさっき女子に『いけない？』って言ったっつうじゃねーか。……それも聞きたくて俺、おめーを探してたんだけど」

さああつと顔が赤くなる。熱かった体が一気に冷房で冷やされたようにクールダウンした。

何であなたがもう知ってるの？
その情報網の速さは何だろう。何ですぐ伝わるのだろうか。あのコは一体何者なのだろう。

そんなことを考えたり、それ以前に彼の言葉に惑わされたり。何かなんだか、もう、わからなくなる。

「ねえ。つまり、それはどういうことなの？」
「なあ。つまり、それはどういうことなんだ？」

自分と彼の言葉が被り、思わず驚いて彼を凝視した。彼も、また自分を見つめ、思わず、ぷ、と噴出した。

それから彼がゴホン、とひとつ咳払いをして、こう言った。

「……俺は、そのままだよ。正直に答えただけ。お前が好きだ。今の状態じゃ満足できなくて。……おまえと、付き合いたかった。『恋人』の関係になりたかった。おまえの誰よりも傍でずっと見

ていたかった。2人で何をしよう、何処にいこう、そんなことはまだ全然決まってねえけどさ。『仲間』というだけじゃ、『家族』という枠組みだけじゃできないことを、おまえといっぱい味わいたいと思ってた。付き合いたいって願ってたんだ。だからあいつらに聞かれたとき、そう思わず答えちまったんだよ」

「・・・!？」

「まさかこんな風におまえに伝わるとは思わなかったけどな・・・。こんな形で告いたくなかったのに」

苦笑混じりにそう呟く彼に、思わず涙が出そうになってきて。

結婚するとかそういうのじゃないのに、ただ『好き』という気持ちを伝えられただけなのに。

どうして、泣きそうになるんだろう。彼に見られたくなくて、思わずそれを飲み込んだけれども。

「後先考えず言っちゃまって、ごめんな。それで何か言われて、傷つけたなら悪かった。でも・・・おまえが『いけない?』って言ったのは、

答えるのがめんどくさいとか、そういうのじゃないんだろ?俺と、同じ気持ちなんだろ?」

泣きそうになった自分に気づいたのか、優しい瞳で、大きな手で自分の髪をくしゃくしゃと子供にしているみたいに撫でてくれて、彼が訊いた。

思わず、こくり、と頷く。

「好き・・・よ、あなたのことが」

ずっと前から。きっと、あなたが自分を好きになるもつともつと昔から。

「そ、か」

ほっとしたように彼が笑った。まるで子供のように無邪気な顔をして。そんな姿に心から嬉しくなる。

キーンコーン カーンコーン

何度目かの終業のチャイムの音に思わず時計を見ると、もう16時半を過ぎていて、先ほどまで暑くじめじめと感じていた風が涼しくなっていたことを肌で感じた。

「んじゃ、帰ろっか。もう時間も時間だし」

チャイムの音に反応して、体を少しだけ動かした彼。思いのほか淡泊なその様子に、少し不満に感じて、彼の背中を睨めば、耳元が真っ赤になっているのに気がついて、思わず口元を綻ばせた。だから。

遠のくその手を掴んで。ぎゅっと握って、こう言った。

「ねえ。お願い。もう少し、もう少しだけ一緒にいていい？」

この余韻を、お願いだからもうちょっと。

このまま、あなたと2人で、もうちょっと。

踵を返し、驚いたような表情で自分を見ていた彼だったが、にっこり笑って嬉しそうに、そして仰々しくこう言った。

「ええ、どうぞ。仰せのままに、お姫様」

握ったその手に、キスをして。

a c t 2 .. C o n a n E d o g a w a ? (前書き)

前回は哀ちゃん視点でしたが、今度からはコナンくん視点で。

どうしてああいういきさつになったかの話です。いわば種あかし。

act2.. Conan Edogawa ?

暑い。どうしてこんなに暑いんだ。

一体梅雨はどこへ行っただ？夏はいつから始まった？

もわもわとした熱気に下敷きで風を作りながら、屋上に続く階段を俺はカンカンと音を立てて上っていく。

まだまだ太陽が上がりきっていないのに、どうしてこんなに暑いのだろう。

前日の仕事疲れで、まるっきり1、2時間目を寝過して。慌てて学校に来てみたけれど、もう3時間目も半分も過ぎていた。

授業に出るのは4時間目にしよう。どうせ授業に出なくてもテストで100点取れる問題ばかりだし。・・・なんて考えながら、駅前のコンビニで買ったばかりの遅めの朝食を持って、階段を上がる。

ドアを開ければ、まぶしいくらいの青空と、それから、温たい突風が体に体当たり、思わず1、2歩後ずさり、それから再び足を踏み入れた。

「あっちな・・・、やっぱ」

ぼそり、俺は思わず眉を顰めて、ボヤキ一つ零した。

梅雨入り宣言を6月の中旬、確かに聞いたはずなのに、それ以降あまり土をまともに湿らすこともないまま、7月になった。

20数年生きていて、空梅雨も覚えていた限り、何度も経験した。温暖化の影響で、その間隔も狭くなってきたように感じる。

しかし自分は『中学生』で、探偵ではあっても、サイエンティストではない。

殺人を事前に防ぐことはできても、雨を降らす機械は作れないし、牛のゲップを止めることもできない。

暗号を解き明かすことができても、オゾン層の穴は塞ぐこともできないし、南極の水を再び凍らすこともできない。

温暖化を止めることすらままならない。

こういうときは自分が出来る限りのことをするまでだ。

今の自分のできる限りのことといえば、・・・自然の中で、・・・寝ること。

お気に入りの場所。貯水タンクの下は陰を作ってちょうどいい。

いつものようにごろりと横になって、斜めに見える高い高い空を見上げる。

何年生きてても、何が地球のどこかで起こっていても、今見上げる空の高さは変わらない。

自分がまだ『工藤新一』だったころ、まだ本当の14歳だったころ、こうやってやっぱり寝転んで空を見上げていた。

隣にはあのととき幼馴染だった彼女。名前と同じ、蘭の花のようにあのころから美しかった女性。

あのころ、心底好きだった女性。

・・・あれから、10年。今では彼女は結婚して一人の男の子の母親だ。

空の高さは変わらずとも、空の色は相変わらず綺麗でいても、人

は、街は少しずつ変わっていく。
そして、人の心も。

時が経つに連れて癒えてきた心の傷。

彼女が悪いわけではない。自分がそう仕向けたんだ。けど、やっぱり、彼女の、蘭の花嫁姿を見るのは辛くて。

隣で、心配そうに俺を見つめるそいつに対して恨みつらみを吐きたくなって、その気持ちを全て押し殺した。

けれどあれから数年、いつのまにか気持ちはその相手に向けられている。

そのことで、なおも自分自身を責め続ける彼女に対して逆に罪悪感を感じた、とかきつとそういうのではなくて。

傍で何とか元氣付けようと、必死になっている彼女を見て、純粹に心を打たれたんだ。

そして、『幼馴染以上になれなかった彼女』への傷も、少しずつ癒えてきた。

・・・そいつのおかげで。

そう、そうやって、

自然と俺の二度目の恋は、始まった。

自分が気づかないうちに徐々にゆっくりと滑走していった。

だから、気づいたときには、夢中になっていたんだ。

彼女の名前は、『灰原 哀』――。

俺のことをきくと『自分への生きた戒め』みたいにしか思っていないのだろう相手。

俺の顔を見るたびに悲しそうな顔をする相手。

そうさせているのは俺だってことはわかっているから。

いくらお前が気にする必要はもうないんだよって言っても、あい

っはいつでも彼女のことを考えているから。

そして、それを俺に見せまいと、何でもないという素振りをしてみせるから。

胸が痛くなるのだ。張り裂けそうになるのだ。

あいつの。

あいつの本当の笑顔が見たいのに。

「・・・俺があいつを笑顔にさせるつつうのがもともと、もう無理なのかな」

もう二度と、まだ『こう』なるとは思ってもいなかったあの小学生の時のように、あいつが時折見せてくれた

あの笑顔を、俺に見せてくれることはないのだろうか。

そんなとき。

ガチャとドアの開く音に、俺は思わず体を起した。

日陰に居たため、そよそよと温くとも気持ちいい風でうとうとしていた矢先に、突然その睡眠を妨げるようにやってきた侵入者。ここにいると時々やってくるあいつ。俺のお気に入り場所（いわゆるサボり場所）を実は密かに熟知しているあいつ。

もしかしたらと僅かな期待を寄せながら、俺は軽やかな足取りでやってくるその足音の主がここに現れるのを待った。

「江戸川君・・・？」

貯水タンクの裏から突然現れたその少女の姿を認めた瞬間、俺は内心がっかりする。

「・・・何だ、早川か」

「ひどいなー、『何だ』はないでしょ、『何だ』は」

思わずつと出たその俺の言葉に、拗ねたように口を尖らせて彼女は拗ねてみせた。

そう、そこにいたのは俺が期待していた相手じゃなくて。

そこにいたのは、クラスメートの早川清香。はやかわさやか

自分の知る限りでは2学年の男子の中では、『見かけ』癒し系美少女、と人気が高い彼女。

吸い込まれそうな大きな真っ黒の瞳と、その瞳と同じ色をした、つやつやとした真っ黒な長い髪。

光彦や元太が、高校生当時の蘭みたいだ、と騒いでいたけれど、俺は彼女と蘭がどうしても同じようには見えなかった。

そこそこクラスの中ではよく喋る相手。だからといって、灰原や歩美、そして『工藤新一』の時に接していた、園子とのような間柄ではなく。

適当に話を合わすようなただのクラスメート。俺はそう彼女のこ

とを見ていた。

「授業はどうした、授業は」

「サボった」

「・・・おい」

「だあって、江戸川くんがいない授業なんてつまないんだもんっ♪」

(おいおい・・・)

にっこり、悪びれた様子もなく言う彼女に対して、聊か眩暈を感じる。

そう、こうやってこいつは自分に対して猛アピールをしてくる。だからといって、彼女を好きではないので、気持ちに答えることはできないけれど。・・・それに、一度足りとて、彼女自身、真面目な『告白』というものを俺に向けてしているわけではないし。だからこそ、スルーできるということもあるのだけれども。

「それにサボったのは江戸川くんこそ一緒じゃない。連日遅刻なんてして。王様気取りもいいとこね」

「・・・わりかったな」

そんなんじゃない。

そう言おうとしたけれど、ここ最近、事件を理由に遅刻、早退することが多くて。

学校側は認めてくれるが、きっと警視庁の人がそれを知ったら一体どんな反応をするだろう。

実際そう考えられてもおかしくはない。そう思ったから、そこは素直に認めることにした。

クスクス、早川はおかしそうに口に手を当てて笑う。

「ねえ、じゃあさ。最近噂が流れているの、江戸川くん、知らないでしょ？」

「・・・噂？」

「そう。・・・江戸川くんと、C組の『吉田さん』が、付き合ってるって」

(な、に!?)

俺は思わず耳を疑った。

一体どこから、どうしてそんな噂が。しかも、何で『歩美』の方なんだ？

「吉田さんってカチューシャの似合うあの二つ結びの女の子でしょ？可愛いよねー。あたしもバツサリ切って、カチューシャしてみよっかな、そしたらあたしのことも好きになってくれる？」

につこり笑ってポーズを決める早川にも、俺はまともに答えることができなかった。

「おい、一体それ、誰伝いで回ってきたんだよ・・・」

「知らないよ。ただ写真部の子と新聞部の子が教えてくれたから。・・・明日の広報に載るんじゃない？『中学生探偵、幼馴染と熱愛?!』ってねv・・・いいなー」

目をキラキラ輝かせる早川の姿に俺はうんざりした気持ちを隠そうとせずに、

「・・・歩美じゃねーよ。あいつは俺の大切な友達の一人だよ」

と吐き捨てるように呟いた。

「えっ！？ そうなの！？ でもあんなに取り巻いている女の子の誰よりも、彼女への優しさは全然違うし。そもそも、『歩美』だなんて呼び捨てしてるし！ 付き合ってる男と女って感じ、するじゃない？」

「幼馴染なんだ、当たり前だろ。何年も幼馴染やってればいろいろ通じるものだって出るだろうし、馴れ合いとかだって」

「そうなのかな。でもそうだね、もう一人のコにも最近なんだか優しいっていうしね。でも、そのコは苗字で呼んでるって聞いたよ？ どうして？」

『もう一人のコ』

その響きに俺はぎくりとしながらも、平静を装った。

「知らねえよ。何となくだよ、何となく」

「ふうん、何となくねえ。・・・怪しいなあ」

軽くジト目を向けて、それから早川は「まあいっか。好きな子がいないなら、あたしが入り込めるチャンスがあるってことだし」と、冗談っぽく笑ってぺろりと舌を出した。

「じゃあ、またね。・・・けど、あなたは帝丹中学切つての大ヒーローよ。かの『工藤新一』も中学ではサッカー界に名を馳せたっていうけれども、事件についてはそんなに有名じゃなかった、って言うじゃない？ サッカーもできて、推理もできて、顔もいい。

そんなパーフェクトなあなたのゴシップとなると、食いつかない手はないからね。・・・覚悟しなさい。新聞部も写真部も、『吉田さん』じゃないって本人が言っただって聞いたら、きっと証拠を掴むためにさらにあなたをストークするはずよ」

「嫌な展開だな、おい・・・」

プライベートでもマスコミ各社に追われている身。学校内でもそれじゃあ休む暇がないじゃないか。

「まー、あたしが立候補してあげてもいいけどね。『江戸川コナン』と付き合ってまーっすv』って。そしたら当たり前すぎて落

ち着くんじゃない？ほら、美男美女カップルだからね、あたしたち」

「やめてくれ・・・」

ぱっさり切り捨てると、俺はごろりと再び横になって彼女に背中を見せた。

★★★

翌日から1週間、俺は早川の言うとおり、前より多くの沢山の新聞部や写真部らしき生徒に追っかけられて。

そんな俺の姿に、灰原は何やってんだか、なんて冷めた目をして俺を見ていた。

呆れた表情で、ぼそり。「ホント、有名人て大変ね」だなんて。

「新聞部も写真部も相当暇なのね。ゴシップなんて調べ始めちゃ、街に蔓延る中身のないスポーツ新聞とかと同じじゃない。・・・私はそれよりも経済や科学。世界情勢を調べた中身のある記事にして欲しいのに・・・」

それに付き合わされて。あなた、ホント、ついてないわね」

意地悪く笑って見せるその姿に、俺は思わず苦笑した。

でもこれがもし『俺は灰原が好きだ』なんて言ったら、全部火の粉がそっちに降りかかってくるんだぜ？

そうはさせたくはないけれど、それでもそんな他人事のような表情を浮かべる灰原に対して、ちよっとした恨みつらみも言いたくなる。

そんなことを思っているとき、それは前触れもなく、やってきた。

「江戸川先輩！」

授業を終えて、体のだるさを感じながら教室を出ようとすると、メガネをかけたまだ幼さが残る少年が、突然行く手を遮った。

何度か顔見知りになっている。こいつは写真部の末端だ。そいつ

の姿を見つけたとき、一瞬ぎくりとしたが、カメラを持っていないのを見て、ほっと息をつくとき、「何だ？」と聞いた。

「水着姿、買いません？」

「・・・・・・は？」

突拍子もないその言葉に、俺は耳を疑った。

「だから、女子の水着姿、買いません？」

「買いません」

ガキの水着姿なんて見てどうする。24歳の男が14歳の子供の水着姿見て喜んでるんじゃない、世も末だ。

・・・・とはいえ、どうしても彼が目の前に出した、数枚の水着写真に目が行くのだけでも。

けど、何故か彼が出した写真は全員知っている女子で。しかも結構よく喋る相手。

吉田歩美、九十九文乃、二階堂サキ、町村千里、早川清香、それから灰原哀。

みんな発育がよくて。ドキドキしてしまっ

ても、どうしても目がいくのが、・・・・灰原。

きつと試されてると思うけど、目が行くのが、灰原。

灰原の胸、灰原の背中、灰原の尻、灰原の太腿・・・・。

「・・・・・・ふう、ん」

にやり、少年は笑った。

「わかりました、先輩の好きな人」

「え」

やばい。バレた。

見ないように見ないようにしていたつもりでも、やっぱり煩惱には勝てなかった。

そんな後悔を抱えつつ、俺は冷や汗が背中から伝い落ちていくの

もしっかり感じていた。

「先輩の好きな人は・・・」

ごくり、緊張で唾を飲み込む。

「先輩の好きな人は、早川先輩ですね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なわけねーだろ！！！」

俺の怒号というか半泣き状態のその突っ込みは教室の前の廊下一体に響きわたった・・・。

★★★

部活も終わり、家に帰る途中で自動販売機でペットボトル飲料を買っている最中、トントンと背中を指先で突付かれた。

内心「またか」と嫌な予感を感じつつ、振り返れば、そこには幼馴染で、そして今回の噂の相手でもある吉田歩美がにっこり笑って立っていた。

「・・・コナンくん大変だね」

夕日のよく見える坂の上で、俺と歩美はガードレールに腰を下ろして、ジュースを飲む。

俺は烏龍茶。歩美はオレンジジュース。

「ああ、・・・なんでこーなっちゃったんだか・・・。ごめんな、歩美にまで迷惑かけちゃって」

「私は全然だいじょだよ。コナンくと噂になっても」
顔を赤らめてそう答える歩美。一瞬短い沈黙が流れる。

「・・・でもさ、みんな鈍いよね。・・・どうしてわからないのかな、コナンくんの本当の好きな人のこと」

「・・・え？」

きよとん、として彼女を見つめれば、歩美は俺の視線を感じていないかのように俺の顔をひとつも見ないで伏目がちに笑みを零した。「見てれば一目瞭然なのに。・・・あのころからコナンくんと哀ちゃんには何かあるなって思ってたけど。今は特に思うんだ。2人のこと見てて」

赤い夕日が煌々と光っている。その様子を、彼女はじっと見つめていた。

「コナンくんの哀ちゃんを見る目、随分と優しくなったよね？」

「・・・歩美」

「応援してるよ、私、2人のこと」

振り返ると、にっこり笑って俺に言った。

「だから正直になってもいいと思うよ？じゃないとまた変な噂が広まって、哀ちゃん変に誤解して、逃げちゃうかもしれない。」

たとえば、哀ちゃんがコナンくんを好きでもね。身を引いちゃうかもしれない」

「灰原が俺を好きでいてくれるなんて。・・・ありえねーけどな」でも、もし、本当に自分を好きでいてくれるならば、そしてその噂を耳にしたとき。

歩美の言うように、すぐにでも身を引いてしまうあいつの姿が容易にイメージできた。

「ありえなくも、ないんじゃない？」

「そっかな？」

「そうだよ、きっと」

「・・・サンキューな、歩美」

「うんv」

歩美はにっこり笑って、それから手元にあったオレンジジュースをこくこくと音を立てて喉に流し込んだ。

act 2.. Conan Edogawa ?

あの日、屋上で初めて早川に言われた日から2週間。

俺と新聞部や写真部の攻防戦はまだまだ続いていた。

写真部のストーキング行為、そして突然現れる新聞部からのインタビュー。

最近歩美の名前が出るのが少なくなってきたように思えたが、それでも彼らが現れる回数は減ることもなく。

まったくプライベートもへったくれもあつたものじゃない。

それでも彼らには彼らのポリシーがあるようで、裏づけが取れない今の状況で新聞を発行することをしなかった。

・・・まあ、それが俺にとつての唯一の救いであつただけれども。

最初は興味津々で見ていたクラスメートにも、江戸川の本当に好きな女は誰だ、なんて騒がれ始めて。

今日は図書室にてエスケープ。奥にある誰もいない薄暗い書庫に身を起き、古びた本に四方囲まれる状態で本を読む。

「みーつけたっ」

特徴あるその声に、俺は、みつかった、と一人心の中で舌打ちをした。案の定、早川清香が書庫に

唯一ある小窓からニコニコ笑って顔を出している。ばきゅんと、指鉄砲なんて作って、俺に向ける。俺はその指をさりげなく払う。そうしてめんどくさいという気持ちを隠さずに軽く睨んだ。

「どーお？ 捗ってる？」

全然効いてない・・・。

「何が」

むすっとして俺が聞き返す。

「調べモンしてたんでしょ？」

「・・・・・・・・そーいうわけじゃねーけどな」

「ふーん」

早川はそう言うのと、興味深々でその畳1畳ほどの書庫に入ってくる。

「じゃあ、隠れてたんだ」

隣に来て、俺の肩に馴れ馴れしく手を置き、にっこり笑ってそう訊ねる。

「・・・・・・・・歩美にもこういう風に毎日追いかけてるわけ？」

彼女の手を自分の肩から『形式上』丁寧に退かすと、俺はどうしても、うんざりした顔を隠せずにこう訊ねた。

あれから既に2週間。ずっとこんな毎日だったら、歩美も相当参っているはずだ。先週は『大丈夫』と笑ってくれたけれど。

「うん、・・・・・・・・でもどうしても行き詰ってるみたいで・・・・・・・・吉田さんにも柔らかく否定されちゃったそうだし・・・・・・・・」

クラスメートもそこまで2人の仲を知っているというわけじゃなさそうだし。・・・・・・・・噂は噂、なのかなあ」

「そうに決まってるんだろ。・・・・・・・・ほら、読書の邪魔邪魔」

「えー!!? もー!!」

しっしっ、と、手をひらひらやって彼女を書庫から追い出そうとしたので、早川はぷうっと頬を膨らませ、軽く拗ねてみせた。

それから、溜息をついて、また口元をほころばせる。

「でもさ、・・・・・・・・知ってる？」

「あん？」

再び手元の本に目を落とした状態で、それでも彼女の言葉に耳を傾ける。

彼女の話は、おそらく話を聞いた次の瞬間、耳から耳へと抜けてしまうとは思っていたのだが。

「最近もう一つの噂が蔓延ってるの」

「噂? オメーもこりねえなー。噂は噂に過ぎねーつつてんのに」
どうしてこうなんだろう、こいつは。俺はうんざりしてジト目で

彼女を睨んだ。そんな俺の視線をもらともせず、

彼女は通常通り言葉を続ける。

「うん、そう・・・なんだけど。こっちの方がホントかもしれないだね。・・・ここ、2，3日急に囁かれ始めた噂。」

新聞部もまだキャッチしてないっていうんだけど・・・」

「・・・誰と誰の噂だよ・・・」

参考までに、そして話のタネに聞いておこうと、俺は目線をちらりと上げて早川の顔を見上げた。

「あなたと」

「・・・え？」

「あなたと、C組の灰原さんが付き合ってる、っていう噂」

「っ!？」

俺は読んでいた本を思わず床に落とした。心臓がどくん、つと一つ、高く波打った。

「両方蔓延してるっていうから、新聞部情報収集に大変みたい。吉田さんの方は行き詰ってるみたいだし、そろそろ本腰いれるんじゃないかな？」

「・・・なんだよ、ソレ」

歩美に続き、今度は灰原か。

彼女の許にも大勢の生徒が押しかけることになるのだろうか。

騒がれるのが嫌いな灰原は、きつと嫌に思うだろう。恨まれることが必然で。

俺は心の底から溜息をつく。

「もうあいつの許には何人か来てんのかな」

「・・・うん、本人は否定してるっていうけど・・・。そりやそうだね、江戸川くんと灰原さんそこまで仲良さそうには見えないし」

・・・わりかったな。

空笑いが思わず口元から零れる。

「新聞部の話を聞く限りじゃ、いつも冷たいことをあなたに言っているそうじゃない？相当嫌われてるんじゃない？」

「……」

早川の口から零れる言葉に、どんどんテンションが低くなる。

「……もうそれ以上言うのはやめてくれ、泣きたくなるから。そう言おうか迷っていた時、ぽつり、彼女が言った。

「デマ、なんでしょ？」

「……デマ、だよ、今は」

あまりにも言われ放題だからと思わず付け足してしまったその言葉に、言ってから、『しまった』と思った。

なんでそんな意味ありげな言葉を使ったのだろう。

「『今』は？……じゃあ未来は変わるかもしれないの？付き合うかもしれないの？そもそも、江戸川くんは灰原さんのことが好きなの？」

やっぱり、早川はその言葉に食いついた。心から驚いた、という表情で自分を見つめている。

つい口に出してしまった、というその自分の口の軽さに自嘲の笑みを含めながらも、仕方なく俺は答える。

「好きだよ、あいつのことは。……その気持ちは、デマじゃねえ」

「そうなん、だ」

ポツリ、早川は相槌を打った。

「付き合うとか付き合わねえ、とか今はそんな状態じゃないけど、でも、いつかはそうなって欲しいと思うよ。

「……ただ、それは俺の願望であって、叶うわけねーけどな。灰原がきつと叶えてくれないと思うし」

「……そうとは限らないじゃん」

思いも寄らない言葉に、一瞬耳を疑った。早川はちょっと怒った

ような顔をして自分を見つめていた。

さっきは、嫌われているだ、なんだと好き勝手なことを言っていた早川が、である。

「そういうこと言っちゃ叶うもんだって叶わなくなるんだから！そんな後ろ向きなこと言ってるから、そのコとうまういかないのよ」

「・・・ああ・・・、ゴメン」

突然形勢逆転で。俺は思わず苦笑した。まさかこいつに言われるとは思わなかった。

『ありえなくも、・・・ないんじゃない？』

先日の歩美と似た何かを感じて。

「・・・灰原さんの気持ち、知りたいの？」

「え・・・？いや、別に」

答えを聞いても、結果は同じ。

嫌われていないにしろ、恋愛感情はきつとない。良くて『どうも思っていない』なんていわれるのがオチで。

結果は見えていることは、見えないフリをしてい続ければいい。

体は14歳。24歳の頭脳を持った14歳。・・・だけど、恋愛については、そんなに成長できていない。

情けないと思われればそれまでだけれど。

「知りたいんでしょう？」

「・・・いや、だから」

「知りたいの！」

「・・・ハイ」

半ば強引にそう認めさせられた感を感じつつも、俺はさっきまでの立場を逆転させられないまま、小さく肯定した。

「あたし、・・・協力してあげてもいいよ？」

「・・・は？」

「灰原さんがどう江戸川くんを思っているか。そうしたら告白できるじゃん、未来が近くなるかもしれないじゃん」

「だから大体解ってるんだって、灰原は俺なんて」

「だから後ろ向きなこととか言わない！」

「ハイ・・・」

俺は仕方なくまた頷いた。

早川が協力する・・・。一体どんな展開になるんだろう。何を考えているんだろう。

「よし、待っててねv」嬉しそうな表情を浮かべ、足取りも軽やかに部屋を出て行く早川に、俺はハラハラしながらその後姿を目で追いかけた。

★★★

それから3日後。

灰原との噂は歩美との噂よりもさらに多く囁かれるようになっていた。

俺のところには直接一人で来るコは少なかったけれど、灰原は灰原で毎日誰かしらが2人の仲を聞きに来るようで。

「いいかげんにしてほしいわ」そううんざりとした表情で呟いたその姿を見たとき、空笑いを浮かべるしかなかった。

早川が言った言葉は頭に残っていたけれども、あんまり深く考えなくなっていて。

まさか、その日にことが起きるなんて、少しも思いはしなかった。

その日はとくに暑い日で。

俺は部活の準備をするためにユニフォームを着て、一人外に出る。サッカーボールを取りに行こうと体育倉庫に向かうと、

「「江戸川くん！」」

黄色い歓声が聞こえ、俺は足を止めた。

振り返れば、プールサイドから水着姿の女の子。どうやら水泳部のコたちのようだ。

クラスメートから、見たことのないコたちが数人、フェンス越しに並んでいる。

24にもなって中学生の女子の水着姿に見惚れるわけにはいかなけれど、気持ちはやっぱりあるようで。

2週間前に写真を見せられ、今度は『生』の水着姿。

俺は呼ばれるがまま、吸い込まれるように彼女たちの方へ歩みよっていた。

「聞いたよー、灰原さんと噂があるんだって？」

「歩美ちゃんの次は今度は灰原さん？江戸川くんも大変だねー」

口々に言う女の子たちに、俺はまたか、と苦笑する。

「でも、あたしは哀ちゃんとコナンくんが付き合うって思ってたけどな」

クラスメートで、小学校からの同級生である女子がそう呟いた。

その言葉に、周りの女の子たちは「えー」と悲鳴のような声をあげて、その少女を軽く睨んだ。

「・・・そうかな」

「そうだよ、見てる人にはわかってるんだって。・・・アユだってそう認めてるんじゃないのかな？アユと哀ちゃんが一番コナンくと仲良くしているんだから。あたしが感じてるんだから、きっとアユだって、2人のこと・・・って、・・・あれ？」

そう慰めてくれたコが突然言葉を止め、校舎を見上げて目を丸くした。一斉に一同、彼女の視線の先に目が行く。

そこにいるのは、・・・灰原で。

怒ったような、泣きそうなそんな表情で自分を見つめていた。思わずにっと口元を緩ませれば、はっとしたように目を大きく開けて、それからさっとしゃがみ込んだ。

不可解すぎる、その行動。

「・・・なんだ？あいつ」

ぽかん、として俺は思わず目を丸くした。

「ほら、ヤキモチやいてるんだって・・・」

「ヤキモチ？まさか・・・」

ハハと、空笑いしていた俺に対して、ぽんと、その女の子はプールの水で濡れたその手で俺のユニフォーム越しの背中をぽんっと叩く。

「ほら、行きなって！」

「えっ・・・」

「気になるんだったら確かめるのが男でしょーが！」

「そ、そうなのか？」

「そう、だから早く行った行った！」

につこり笑う少女に俺は半ば強引に押されつつ、1，2歩校舎に向かって歩き出した時、声がかかった。

「がんばれ！」

「やー！行かないでー！ー！！！」

「やだー！」

水泳部の女子たちに背中を押されたり、袖を引っ張られたり。

一体俺はどうすればいいんだよ・・・？そんなことを考えながらも彼女のいるであろう屋上に向かう。

行ったところで何を聞こうか何をしようか、だなんて全然思っ

もいなかったけど、とりあえず、ここから去らなければいけない雰囲気にあるようで。俺はとりあえず、走った。

「~~~~っ!!! もぉー! 全速力で走れー!!!」

「走らなくていいー!」

後ろから叫ばれるそんな声を聞きながら、俺は下駄箱までとりあえず走ってようやくたどり着いたとき。

セーラー服の裾が見えて、思わず立ち止まった。もぞもぞと動くその気配にどきん、と胸が高鳴る。

まさか。

「灰原?」

おそるおそる下駄箱の陰をそーっと覗き込むと、そこにいたのは、

そこに、いたのは――。

a c t 2 .. C o n a n E d o g a w a ? (後書き)

歩美ちゃんをアユと呼ぶ女子（笑）。誤字脱字があったから、ついでに冒険してみた（笑）。

コレ読みながら、文章軽いなーって。楽しく書いてるなあ、と思う。

act 2.. Conan Edogawa ?

灰原を探して下駄箱まで行つて。

下駄箱の陰に隠れていた人陰に、灰原かと思って思わず声をかけた。

でも、そこにいたのは。

「やっ、色男くんV」

「・・・」

そこにいたのは、灰原ではなく、今あんまり会いたくない人物、早川清香であつて。

またこいつか。・・・正直、そう思わずにはいられない。

「何？俺、今、急いでるんだけど」

何が嬉しいんだか、彼女はくすくすと声を上げて笑った。

「出会い頭で恐縮なんだけどさ、ちょっとしたクイズをやろうと思つて。つきあつてくれない？」

「・・・は？だから俺、今急いで・・・」

「・・・では1問目！行きます！」

「・・・」

彼女のテンションに思わず乾いた笑いを浮かべながら、俺は仕方なく彼女の『突撃！クイズ大会』に付き合わされる覚悟を決めた。

「第1問！じゃーじゃんっ！あたし、早川清香は実は今までとある場所であることをしていました。さて、私はどこにいたでしょうっ♪」

「・・・さあ・・・。教室にいたんじゃないね？」

話を早く終わらせたいたがために適当に答えた俺に対して、早川は倍以上のテンションで返す。

「ぴんぼーん！さっすが江戸川くんっ。じゃあ2問めっ！・・・何をしてたでしょうっかっ！」

「どーせ、日直の仕事でもしてたんだろ。それか、クラスメイトと話してた」

俺の読みに、嬉しそうに早川は顔をくしゃくしゃにして、「ぶぶー」と言った。

「半分正解で半分不正解。誰かと話してたってことは合ってたけど、それはクラスメイトじゃないし、日直の仕事をしていたのはあたしじゃなくて、彼女」

「ああ、そっか。・・・じゃ」

「第3問っ！」

「まだあんのかよ・・・」

思わず突っ込みを入れる。急いでるのに、いつまでやらせる気だ。これから灰原を探さなくちゃいけないっていうのに。

「わりーが、もう行くぞ」

「だめっ！ラスト問題！」

上靴を履き替え、教室に向かおうとしたとき、ぎゅっと腕をつかまれ、行く手を阻まれた。

「ほんつとに・・・いい加減にしねーと・・・」

「ラスト！・・・第3問っ。・・・あたしは今まで誰と会ってたでしょうっかっ！」

早口で捲し上げられ、俺はその威力に負けた。仕方なく適当に答える。

「・・・んじゃ。・・・。。。。灰原？。。。。なんつって」

「ぴんぽーんっ！おーめーでーとーございまーす！……豪華ハワイ旅行ペアで4泊6日間の旅！……なんちてー！」

「っ！？」

彼女の言葉に、俺は思わず耳を疑った。

灰原が、早川と？いつ？何で？

「おまつ、今何てっ！？」

「あ、ハワイは冗談よ。いち女子中学生がそんな金」

「んなのわかってるから！そーじゃなくて！」

「あ、よかった。でねでねっ♪個人でリサーチしたところっ！……

・灰原さん、意外と脈ありって思うんだよねえ……」

「つか、オメー、何勝手に灰原と接触してるんだよ……。……
て……。何！？」

飛び上がるほど驚いた。

「だあかあらあ。『江戸川くんと付き合ってるの？』って訊いたら。……いけない？って答えたの。『いけない！？』だよ？

チョー怖いと思わない？ジェラシってたよ、明らかに……」

(！?)

「ちよ、ちよー待て、悪いけど、もう一度言ってくれねえかな？」

「だから、『付き合ってるの？』って訊いたら、あのコ、『いけない？』って答えたの。変でしょ、付き合ってもないのに……。！
きつと対抗したんだよ、『だからあたしのコナンに指一本でも触れるな、がおー！！』ってね」

両手を前に出して、ライオンが動物を襲う時のようなポーズをして、それから笑った。

「『いけない？』って……。そう言ったのか？」

「だあかあ、ああ、そう言ってるでしょお？ちゃんと聞いてよ、もうっ！」

「~~~~っ！！」

意味解らない。何だそれ。

俺の思考回路はショート寸前。大混乱真っ只中。

きっと頭の中が一つの世界であつたとすれば、地震や津波がそこら中で起きているに違いなかった。

彼女が言ったその言葉の意味が、本当に「ジェラシー」とは限らないけれど、それでも『つきあってもいない』のに、否定ではなく、肯定の意味にもとれる『いけない？』なんて言葉を喋るなんて。

早川の話ももうそれ以上聞かずに、俺はさよならも言わずに再び走り出した。

さっきまで全速力でなかった力も、今ではもう、これ以上ないほどの力までヒートアップ。

階段をかけ上り、屋上へ向かう。

1階、2階、3階・・・。

はあはあ息を切らせながら階段を駆け上がる。

わからなかった。何もかも。早川の言っている意味が。灰原の言葉が。

だから直接聞きたかった。聞いて、その意味を、真意を知りたかった。

単なるめんどくさくて言った言葉なのか。それとも、それは早川の言ったとおり、『ジェラシー』なのか。

後者でもちろんいて欲しいに決まってる。

はあ、はあ、はあ、はあ。

息を切らせ、階段を駆け上る。

そうして屋上まで来て、立ち止まり、ドアノブをかけたその時。そこには誰もいない気がして、突然ノブを回すのをやめた。

ここまで来たのに、そこにあいつはいないだろう、と急に思えたのだ。

目が合って、俺から隠れるような行為をしたというのに、ぞの俺がたどり着くまで待っているほどあいつは馬鹿じゃない。

かといって冷静すぎるほどの判断は今のあいつは持っていない、そんな気がした。

あのとき、プールサイドで屋上で俺を見ていた灰原と目が合ったときのあいつの表情。

かなり動揺していた。冷静さを失っていた。あれが演技とは思えないし、そもそもそんな必要があるとは思えない。

一気に外へ出ようとした矢先、俺の足音を聞いて校舎に出られないと知ったアイツはきつと・・・。

踵を返し、再び元来た階段を駆け下りる。4階にはきつといないと踏んで、そこには寄り道はせずに、3階へ。

ここでいなかったらシャレにならないけど。

はあ、はあ、はあ、はあ。

肩で息をしながら、廊下に出て、すぐ脇の教室に足を踏み入れて。教卓の先に、陰からセーラー服のスカートの裾が見えて、俺はようやく安堵した。

「・・・・何、やってんだよ・・・」

全速力で走ったので、頭まで酸素がまわらない状況で、俺は教卓の陰にいる彼女を、頭上から覗き込む。

はっとしたように一瞬、身じろぎをし、それから観念したかのよ

うに灰原が俺の前に姿を現した。

決まり悪そうに時々俺の顔を伺えば、目が合った瞬間、怯えたようにさっと視線を逸らした。

「・・・まったく。・・・何、やってたんだよ、おまえ」

何で逃げるんだ？何でそんな顔をするんだ？聞きたい気持ちがどんどん溢れ出て、言葉に出てくる。

「・・・それで隠れていたつもりかよ。・・・つか何で隠れてるわけ？・・・俺が何かしたかよ」

・・・お前とかくれんぼなんてした覚えもねーしな。つか、そんなの灰原がするわけねーか。

最後は普通の独り言に戻ってしまって、俺はそんな自分に思わず苦笑した。

そうして、灰原に目をやれば、彼女は怒ったような、拗ねたような表情で自分を睨んでいた。

そこで確信する。

「・・・何かしたのか、俺」

灰原の表情が肯定をさしていた。

「・・・何、したんだよ」

責められるとすれば、自分と灰原が付き合っているという噂が流れた、それだけのこと。

迷惑だ、なんて罵られることもあれ、なんで逃げられなければならないのだろう。

早川の質問に、『いけない？』って答えたから？じゃあ今のこの鋭い睨みは何だ？

意味が解らない。・・・何で俺が怒られるんだ？

「何、したんだよ」

「私に言わせるの？」

「・・・ああ」

「~~~~っ!!」

さらに彼女の怒りモードがぐんぐん急上昇しているようで、俺は内心ハラハラしながらその答えを待った。

「・・・あなたなんですよ? 『私とあなたが付き合ってる』なんて噂を流したの」

灰原の言葉に一瞬耳を疑って。・・・寝耳に水だ。

「はあっ!? いや、俺じゃねーよ。なんで俺がそんな噂ばら撒かなきゃならねーんだよ」

そんな噂を流すような男だといいつに思われてたのか、と軽いシヨックを受けていた俺だが、先ほどのことをふと

思い出し、苦虫を潰したような顔をして、ぎりりと唇を噛み締めた。

早川.....

あいつだ。

クスクスと嬉しそうに笑うあいつの顔が目には浮かぶ。

先ほどまで灰原と接触して、個人で俺へのリサーチした、と言っていたが、きつと灰原の気持ち

確かめるために嘘を練りこんだに違いない。

それがどれほどの嘘かは知らないが。・・・そうして灰原の気持ちを引き出した。

そう確信したから、腹が立った。

「たく.....。よけいなことしやがって」

思わずそう呟く声が漏れたが、幸い、灰原の耳に届くことはなかった。

けれど、ここまでされて自分が何も動かないほどバカらしいことはない。そう思ったから、俺はそこで行動に出た。

「・・・・・・・・・・噂は流したのはしらねーけど。ただ、訊かれたから」

「え？」

きよとん、とした表情で、灰原は俺を見つめていた。「だから・
・俺は言葉を続ける。」

「訊かれたから、『そうなりたいとは思う』と答えた。・・・・
・悪かったかな？」

「!! なんてっ・・・・」

「つか、お前だってさっき女子に『いけない?』って言ったつうじゃねーか。・・・・それも聞きたくて俺、おめーを探してたんだけど」

そこで、彼女の頬がさっと赤らんだ。やっぱり、早川のその情報は嘘じゃなかったようだ。

俺は心の中で小さくガッツポーズをする。

「なあ。つまり、それはどういうことなんだ？」

「ねえ。つまり、それはどういうことなの？」

灰原と自分の言葉が重なり、俺は一瞬だけまじまじと彼女の顔を見て、それからぷっと吹き出した。

目の前の彼女はただ戸惑ったまま自分を見つめていただけで。そんな彼女の顔を見て、俺は思わずごほん、と一つ咳払いをする。

「・・・・俺は、そのままだよ。正直に答えただけ。お前が好きだ。今の状態じゃ満足できなくて。・・・・おまえと、付き合いなかった。『恋人』の関係になりたかった。おまえの誰よりも傍でずっと見ていたかった。2人で何をしよう、何処にいこう、そんなことはま

だ全然決まってねえけどさ。『仲間』というだけじゃ、『家族』という枠組みだけじゃできないことを、おまえといっぱい味わいたいと思ってた。

だから、付き合いたいって・・・願ってたんだ」

「・・・!？」

「まさかこんな風におまえに伝わるとは思わなかったけどな・・・。こんな形で告いたくなかったのに」

半笑いを浮かべ、俺が小さく呟くと、目の前の灰原の顔は今にも泣きそうな表情をしていて驚いた。

「後先考えず言っちゃまって、ごめんな。それで何か言われて、傷つけたなら悪かった。でも・・・おまえが『いけない?』って言ったのは、

答えるのがめんどくさいとか、そういうのじゃないんだろ?俺と、同じ気持ちなんだろ?」

思わず言葉が次々とこぼれ、彼女の髪の毛をいつのまにか撫ぜていた。くしゃくしゃと、そこまで丁寧じゃないけれど、それでも灰原は俺の行為に拒絶することもなく、ただ、素直にこくりと頷いた。

「好き・・・よ、あなたのことが」

彼女のその唇から漏れるその言葉。撫ぜていたその手を止め、俺は暫くその余韻に浸っていた。

「そ、か」

まさか、本当に彼女の・・・灰原の口からこんな言葉が聞けるなんて思っても見なかったから。

ほっとして、俺はようやく口元を綻ばせた。

キンコンコン カンコンコン

何度目かの終業のチャイムの音に反応し、俺は手元の時計を見ると、もう16時半を過ぎていて、俺はほっと息をついた。

「んじゃ、帰ろっか。もう時間も時間だし」

そう言っ、灰原から背中を向ける。顔が耳まで真っ赤になっていることを、灰原に知られたくなくて。

足早に去ろうとしたとき、ぎゅ、と手を握られ、驚いて振り返った。

「ねえ。お願い。もう少し、もう少しだけ一緒にいていい？」

恥ずかしそうに顔を赤めながら、それでもはにかんだ笑みを浮かべて小首を傾げて訊いてきた灰原に、俺は一瞬

耳と目を疑った。彼女のその行為に、その言葉に、大袈裟ながら衝撃を覚え、暫くぽかん、と見つめているしかなくて。

それから少しずつ、しかし確実に強く愛しさが増して。抑え切れなくて。

抱きしめたい衝動に駆られたけれど、全てのエネルギーを彼女にぶつけるわけにはいかなかったから。

吃驚して怒らせるわけにはいかなかったから。

その手をそっと自分の口元に持ってきて。そして。

ちゅっと一つ、キスをする。

「ええ、どうぞ。仰せのままに、お姫様」

仰々しく、彼女の要望に答えたフリをして、ちゃっかり自分の欲望も満たさせて。

・・・勿論、こんなんじゃ満足できるはずはないけれど。

それでも、彼女が笑ってくれる顔が見たいから。愛おしそうに自分を見つめてほしいから。

キスをする唇に少し、力が籠った。

a c t 2 .. C o n a n E d o g a w a ? (後書き)

とりあえず本編終わりです。

次はエピソードみたいなものです。

[Gossip] A sequel to the story a

ゴシップ後日談です。

蒼い空、白い雲。そして深い深い藍の海。

黄金色した砂浜がキラキラと太陽の光を浴びて煌びやかに光っている。

そんな景色を見た瞬間、白い麦藁帽子を見た彼女がたった一言「綺麗」と呟いた。

白いサンダルは海に濡れてもいいようになってはいるはずなのに、海水に足をつけることもなく、ただ少し離れたところでじっと見つめている。

足だけでも海に入ればいいのに、と誘うと、灰原は「今日は見るだけでいいの」とだけ言った。

”2人だけの外出”・・・夏休みに入る前は本当にそれどころじゃなかった。

灰原と思いを伝え合った日の翌日、校内新聞に堂々とトップで乗った2人の記事。

早川が新聞部にタレこんだのか、それとも独自のスクープか。前者の方が強いと踏んでいたが、それを確かめることもせず、学校全体のお祝いムードに流されてしまった。自分たちを見つめる好奇の目。

どうしてここまで、この時期の子供はこういう話題が好きなんだろう。

うんざりするほど集まる校内からの目、目、目に、俺たちはとかく辟易していた。

どこで誰かが見ているかわからないから、俺と灰原が付き合ってから夏休みに入るまでの9日間、2人で近所を歩くこともままならず。

別に悪いことをしているわけじゃないんだから、堂々と歩いてい

ればいいんじゃないか。そうは思っている、彼女はそうすることを嫌がった。

わざわざ人目に晒されたくはない、と。少し距離を置きましょう、と。

だからデートも×。登下校するのも×。お互いの家を行き来するのさえ×。

付き合って3、4日でそんな宣告を受けて、一体俺はどうすればいいんだ。だったら付き合わなければよかったんじゃないか。

フラストレーションは溜まる一方で。

だからといって、事件も部活もあったから、何とか人に当たることは避けられたけど。

そうしてそんな気持ちで夏休みに突入し、5日目。暑さとショックで気だるい気持ちでいるときに、彼女のメールが入った。

『海に行かない？』

灰原哀』

一言だけの簡素なメール。だけど、確実に彼女から来たお誘いメール。

そんなメールを貰ったから、飛び上がる気持ちで即OKのメールを送り、日程を決めてその日が来るのを待ちわびていた。

それなのに当日、灰原を迎えに行こうと家に出たのは、哀の保護者である彼のお気に入りワーゲン、そして助手席には愛する彼女が乗り、その隣の運転席にはアロハシャツの禿頭の男性がいたときには、思わずげんなりしたものだった。

けれどそんな彼も、目的の場所に着いた今は気を利かせてくれたのか、一人海岸近くを散歩している。

「ようやく2人になれたな」

俺はそう言って灰原の隣まで追いつくと、眩しそうに海を見つめ

る彼女に声をかけた。

「まるで博士が邪魔だったみたいじゃない」

振り向きもせず、しかし楽しそうに灰原が答える。いや、実際そうなんだけど。

「噂って大変ね……。ここ1ヶ月はホントに翻弄されっぱなし。

……。あなたと彼女……。……。蘭さんも、こうだったのかしら」

「俺が工藤新一だったとき？」

「……。そう」

ジェラシーとかそういうものではないらしい。ホントに心からの疑問だったようで。そうわかったから、俺も正直に答える。

「ん、俺と蘭は園子に言わせれば『公認』だったみたいで。小学校の頃から解りきっていたことだから、当たり前すぎてスクープにも何にも

ならなかったらしい。それにクラスでも、俺たちにそういう何も知らない他校から来た、あるいは学年の違う新聞部員や写真部員が変なことをして。俺と蘭の間にいざこざができて気まずくさせたら許さないのなムードがあったみたいだから。……。まあ、それも俺が……。『工藤新一』が消えたことで全て終わったけどな」

「っ……。ごめんなさい」

俺の言葉に、彼女の声のトーンが落ち、みるみるうちに気持ちが沈んでいるように思えた。

灰原にとって今も消えることのない心の傷。それを俺は自ら掘り起こしてしまった。一瞬後悔の念が過る。

けれど、俺はそんな念を振り払う気持ちでさっさと彼女の手を引き、自分の方へと向かせた。

「バーロ」

お決まりのセリフ。驚いたように哀は俺の瞳を見つめた。

「オメーが気にすることないって何度も言っただろ」

宥めるようにそう言っただけで、俺は彼女の柔らかい唇に、繋いでいい方の人差し指をぎゅ、と押し付ける。

彼女に何度も言ってきた言葉。言わなくてももうお互い言葉としてはわかってるから、この先は言わないけど。

”わかってるわ、でも……”

唇を押し付けられたまま、それを退けようともせず、そう言いたそうに視線を泳がせる彼女に対して、俺は押し付けていた人差し指の力を弱め、その手で彼女の頭をくしゃくしゃと柔らかく撫ぜた。

「わかってるだろ。俺がおまえを好きになった理由。……俺を、ここまで変えてくれたのは、オメーのおかげなんだぜ？」

たとえば、それが罪だとしても。

工藤新一と毛利蘭が築く筈だった未来を絶たせた原因を作った罪があったとしても。

今の自分を作ってくれたのは彼女だから。

もういつまでも悩まないで欲しい。

そんな俺の言葉に、一瞬驚いたような顔をして、それからくす、と彼女はいつもの笑みを浮かべた。

「そうね、そして私をここまで変えてくれたのは、あなたと……。そしてみんなのおかげ」

「ちょ。そこでは嘘でも『あなたのおかげ』って言うんじゃない？」

「ふふ、そうね……。でも、感謝してるわ。あなたには」

手が。

灰原の細い手がうっと伸びて、彼女の頭を撫でている俺の手と、彼女の手を掴んでいるもう片方の俺の手を順番に退けた。

それだけで終わらせるつもりだったのだろう。わかっていた。けれど、俺はそれだけじゃ物足りなくて。

再び彼女の手を掴み、さっきより強く引き寄せる。

「きゃっ」

一瞬だけ灰原の体勢がぐらりとよろけ、「何するの!？」と彼女

が声を上げ、強く俺を睨もうとしたその時に、
さっと彼女の体を抱きしめた。離したくなかった。

逢えない。逢えても話せない。手も触れられない。キスもできない。

付き合って2週間。だけど全て彼女を遮断された俺はそれだけじゃ我慢できなくて。

エッチをしたいとか、いきなりそんなことをする気持ちはないけれど。・・・そりゃあ本音を言えばしたい気持ちも山々だが。

せめて彼女のぬくもりを全身で味わいたいから。
次触れるときがいつかわからないから。

「暑い・・・から、やめてくれない？」

腕の中、俺の胸板に押し付けられた彼女が、籠るような声でそう言った。

その言葉にはっと我に返る。そういえば、と。汗臭くなんて、なかったか、と。

汗ばんでいる自分の体に気づき、慌てて彼女を抱きしめる力を抜いて、そっと彼女の顔を窺えば、彼女の顔はとっても赤らんでいて、困ったような、戸惑ったような、そんな可愛い顔をして。

ほっとして、そして、また彼女の表情にどきりとして。

それからさっきよりもっと強く、抱きしめた。

観念したのか、灰原はそのまま力を抜き、体を俺に預けた。

しなやかな腰に手を回し、俺は彼女の温もりを、柔らかさを、細さを確かめる。

「・・・ねえ、貴方に一つ、聞きたいことがあるの」

消え入るような声で灰原が俺に言うから、俺は彼女の柔らかな頬に触れ、その濡れたような瞳を見つめた。

「え？」

「・・・あのね」

一瞬、言いにくそうに視線を泳がせて、「やっぱり何でもないわ」と呟いた。そうして彼女からゆるゆると俺の腕にその細い腕を絡め、再び肩に頭を預けた。

彼女が本当は何を言いたかったのかはわからなかったけれど、それでも灰原からそんな行為をしてくれることが嬉しくて。

俺はあまりその言葉を気にすることは、しなかった。

★★★

「・・・ふうん。それから？」

家について暫くベッドの上で寝そべって疲れを癒していると、程なく携帯電話に電話が入った。

電話の向こうは幼馴染の吉田歩美。少し語調がきつい彼女の様子に、俺は半ば戸惑う気持ちを隠せずにいた。

「それから・・・って」

「海見てそれからどこに行ったの？ レストランとか行ったの？ それから、キスとかはしなかったの？」

「バツ・・・バーロ！何言ってるんだよ、すつ、するわけねーじゃねーか」

本当は、あのあとそのまま唇を重ねようとしたけれど、さらりと交わされて、逃げられてしまった。ただそれだけなんだけど。

「ホントにしてないの？」

「してねーよ」

だからしようとは思ったけど。

「ホントに？」

「・・・ホントだってば」

どうしてだろう、今日の歩美はしつこい。根掘り葉掘り今日あったことを聞き出そうとして。それがあの噂記事を書いた新聞部や写真部と同じ質かと聞けば、まったく別物ではあるということとはわかっていただけれど。

「つーか、何でお前、俺と灰原が今日出掛けること知ってるんだよ」

「出掛けるじゃなくて、『デート』でしょ」

言い直されて、ぐっ、と言葉に詰まる。

「だって私が哀ちゃんに言っただもん。・・・付き合ってるならデートぐらいしなさい、って」

「え？」

驚き、耳を疑う。

歩美が？どうして？

「だって付き合ってもどこにも行かないで家にいるなんて聞いたからびっくりして」

「それは・・・灰原がそう言ったから」

俺の言葉に、歩美はカッと目を開いてこう叫んだ。

「それはまた早川さんに変な噂を流されなくなかったからでしょ！？ううん、そうやってどういう形であれ、コナンさんと仲良くしてもらいたくなかったからじゃない！！」

「・・・っ！」

つまりは、灰原は早川の存在を知っていて、早川にジェラシーを感じていた、ということだろうか。

寝耳に水で、俺は信じられない気持ちで歩美の話を聞いていた。

「2人が付き合うことは、哀ちゃんから教えてもらってすぐに知ったけど。・・・コナンくんは何も教えてくれなかったよね。気がついたら、噂の陰にいつも早川さんがいた。コナンくんの傍で早川さんがいつも笑ってた・・・。私が・・・友達を盗られて寂しいと思うように。・・・哀ちゃんはもつと不安を抱えてたと思うよ？言ったでしょ、前にも。『自分に正直になって』って。・・・付き合ってからそれは変わらないんだよ？

言葉は伝えないと、伝わらないんだよ？」

そういえば、と歩美の言葉で思い出す。

さっき、灰原が言いかけた言葉。もしかして俺と早川のことだったんではないだろうか、と。

「哀ちゃんにもね、同じことを言ったの。『自分の気持ちに嘘なんてついちゃだめだよ』って。逢いたいときに逢わなきゃダメだよ、って。」

・・・コナンくんの前で、哀ちゃん、少しは素直になっていた？」

「・・・たぶんな」

「そう、よかった」

ほっとして電話の向こうの歩美は笑っているように見えた。

「だったらコナンくんも伝えなくちゃダメだよ？早川さんとのことも。どんな関係なのか一から十まで全部。私たちに言うのはいつでもいいから。」

ただ、哀ちゃんにだけにはすぐに伝えてね？・・・もう早川さんにはのせられないでね」

「あ、・・・ああ」

念を押されるように言われるから、俺は思わず苦笑に近い笑みを浮かべるしかなかった。

のせられていたのか・・・。そう思えば思えなくもない。

早川はホントに俺のことが好きだったのか。本当に俺と灰原の恋に協力したかったのか。

もしかしたら、新聞部か写真部のスパイで、何気なく俺の傍に近づいていたのかもしれない。

いろんな思いが、悪い方へ悪い方へと浮かんできて、それもまあ後で本人に確認しなくちゃなとひとりごちた。

今まで自分が悩まされてきた『ゴシップ』というものもそうだけれども、人の言葉というものは、誤解が誤解を生むから。

ここ数週間付き合ってきて、それほど彼女は悪いやつではないよ
うな気がしてきた。

もちろん、まだまだ彼女には悪いが疑う余地はあるし、今回の騒
動の大本は彼女。

けれども自分のために、やり方は肯定できないが何とかしようと
してくれた。

それが全部新聞部と釣るんでやったことだなんて思わなかったし、
思いたくもなかった。

歩美に言わせればきつと怒られるだろうし、灰原には絶対言えな
いことだけれど、川の所為とはいえ、今回の件でいろいろ考えるこ
とができたから、そういう意味では感謝しなくてはいけない。そう
思っていた。

だからといって、彼女と関わることはもうなるべくならしないう
もりでいるけれど。

「・・・じゃあね。今日はお疲れ様。・・・哀ちゃんと一緒に過
ごせてよかったね」

「・・・ん、ああ」

「大切にしてね。哀ちゃんのこと」

「・・・わあってるよ」

「絶対よ？絶対の絶対だからね！」

「ああ」

しつこいくらい何度も何度も確かめる彼女に、親友を大切に思う
彼女の姿を見て、思わず微笑み、電話を切った。

「さて、と」

再び携帯電話を握りなおす。

そうして大きく深呼吸をしてから、彼女の名前を履歴から探し、
ボタンを押した。

もちろん、相手は『灰原哀』。

全ての詳細を伝えるために。今日のデートの余韻を楽しむために、

次のデートにこぎつけるために。そして、彼女の声を聞くために。彼女が好きで好きで溜まらないから。今日久しぶりに逢えて、話せて、触れて、よくわかったから。

夏休み中に何度も逢って話がしたいから。デートがしたいから。抱きしめたいから。あわよくばキスもしたいから。

人の噂も75日。あっという間に新しいゴシップがやってくる。夏休みが明けたら、いつもの生活に戻りますように。明ける前にも何度もデートができますように。

そう祈りながら、俺は彼女が電話に出る声を待った。

3度のコール音。そして――。

『はい』

彼女の声が聞こえる。

さつき逢ったばかりだというのに、待ち侘びたその声に、俺は思わず微笑んだ。

FIN<

<

哀視点&コナン視点で。

これは実は管理人のどん★ぐりこさんとコラボした10万打記念で、彼女のステキ絵も実はあったんですよ。二人で、お題をいくつかあげて話し合ったのは楽しかったなあ。

この小説のほとんどの話に出てくる早川さんは、どこかで書いたかもしれないませんが、長編小説『またあした・・・』の栗毛の少女と喋り方など似ている部分が多々あります。

でも、こういうのがイマドキの女の子なんだろうな、と割り切っています。だからわざわざ性格を変える必要なんてないんじゃないかな、と。

そう、今までもキーパーソンになりうる人であっても、ホントに脇役のうちの脇役でもちよいちよいこういう女の子登場したことがあったりして……。だから、オリキャラなあははずなのに、何故か愛着が沸くんですね。

もちろん、100パーセント同じ性格じゃありませんけど。

これからも、きつとこの『早川さん』は、名前を変えて、これからもきつと、小学生であつても、中学生であつても、彼らの周りに現れるんじゃないかなあと思っています。ので、見逃さないでくださいね。

では、本当にここまでお読みいただきまして、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5560/>

G o s s i p

2010年10月12日04時28分発行